

# ひなまつりの催しを

## 中心として

### —卒業期の子どもと教師の雑感—

村 石 京 子



#### ○ひなまつりの計画

毎年、二月の終り近くから卒業の日まで、年長組の担任の教師はとても忙しい日々を過ごします。今年は、私もその番になりました。

まず三月三日のひなまつりの催しがありますが、その計画のことから書いていこうと思いました。ひなまつりは、私たちの幼稚園では子どもたちもお母さんたちもとても楽しみな行事事とな

っています。子どもたちは年長組二組が中心になりますが、幼稚園中参加して代わり合ってうたをうたったり、ゆうぎをしたりしますのでとてもぎやかで楽しい一日ですし、お母さまたちはこの日はお客様として招待されて、ゆうぎ室でゆっくりと子どもたちの活躍を見せてもらえるうれしい日だからなのです。

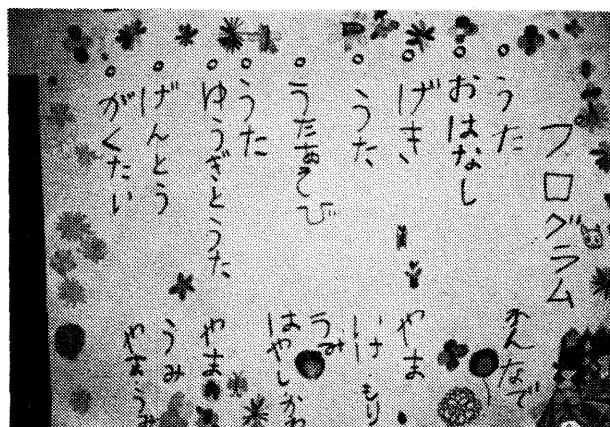
今年のプログラムは左のようでした。



#### ひなまつりプログラム

- |   |                   |           |
|---|-------------------|-----------|
| 1 | うた（おひなさま）         | みんなで      |
| 2 | 園長先生のおはなし         |           |
| 3 | げき（北かぜと太陽）        | やま        |
| 4 | うた（トンツウツウトン）      |           |
| 5 | うたあそび（？？？）        | うみ        |
| 6 | うた（たかいぞたかい）       | かわ・はやし    |
| 7 | ゆうぎ（カールちゃん        | 人形の夢とめざめ  |
| 8 | どうた（トルコマーチ        | 手のひらを太陽に） |
| 9 | げんどう（どうぶつえんゆき）    | うみ        |
|   | がくたい（春がきた（ひなまつり）） | うみ・やま     |

## プログラム



このプログラムをきめるまで私のクラスではいろいろと計画に変化がありました。まず一応の計画を私がたててから、子どもたちと相談しました。

すと、やろうといふ反響が思つたより大きかったり、場合によつては少なかつたりいろいろな場合がでてくることがあります。

劇あそびは今年は「北かぜと太陽」の話を劇あそびに構成してみました。はじめ私の予定としては、登場人物も限られているのでクラスの半数位の子どもに参加してもらい、後の半数の子どもももう一つ別の活動で発表してもらうようにしようと考えていました。ところが、北風と太陽のストーリーを話してから、いざとりかかることがあります。教師の計画で進めていく場合も、ある場面では必要なこともあります。そこで、劇・紙芝居・ペーパーサート・人形芝居等々について相談してみますと、人形芝居がやりたいという意見や、それより紙芝居してもらいたいと思いました。

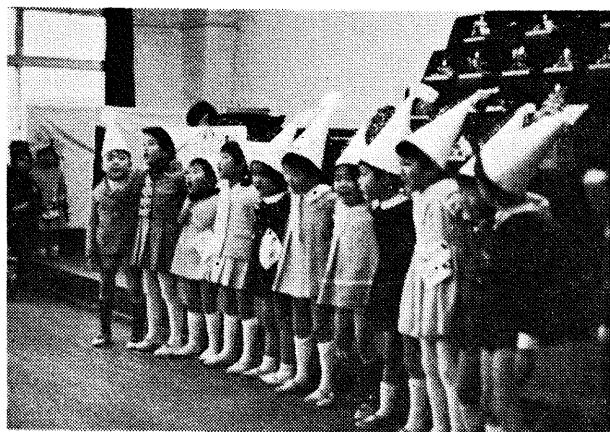
そこで、劇・紙芝居・ペーパーサート・人形芝居等々について相談してみますと、人形芝居がやりたいという意見や、それより紙芝居してもらいたいと思いました。

その結果、登場人物は次のようになりました。

進めていく場合も、ある場面では必要なことがあるかもしれませんのが、プログラムの後の方のゆうぎどうたは、私の計画で進めて行こうと考えましたので、今一つはなるべく子どもたちに計画にも参加してもらいたいと思いました。

|             |              |
|-------------|--------------|
| お日さま……………1人 | りす……………6人    |
| 北かぜ……………3人  | くま……………6人    |
| たびびと……………3人 | ちょうちょ……………5人 |
| ゆき……………11人  | おはなし……………1人  |

これも最終段階としておちついたものが右のようなわけで、はじめの二、三日は好きな役を何人でもなつてやりました。あるどきは、雪が大勢になつたり、数人になつたりしましたし、お日さまも四、五人のこともありました。また動物たちがいろいろでてきますが、これは幼稚園の劇あそびの特徴みたいなものですが、ストーリーそのものとは直接関係はないのでその動物がりすになつたり、うさぎになつたり、小鳥になつたり、またお花になつたりとその時々によつてかわりました。けれど次第に子どもたち自身で、お日さまが幾つもでるところがよいという方向づけがおのずとできてきました。やりたい役を交替



雪の子どもたちがうたをうたっているところ



くま、そろそろ春がきたかと穴からでてきたところ

してやつているうちに、その役のイメージというものがだんだん明確になってきて、本番には北風がやりたいとか、私は雪の子どもになりたいとか希望もはつきりしてきましたし、子ども同士のすいせんもありました。

例えば「北風はTちゃんが大きくて強いからTちゃんがいいよ」「それがいいよ」といった具合にして、本人もまんざらでもなさそう

北風「僕たちの方が強いよ」  
太陽「いいえ私の方が強いですよ」



「それじゃ南極観測船ふじにのってきただよ」といました。  
B夫は「ぼくのはレオ（ジャングル大帝）みたいに強い白いくまで森にいるんだよ。白いライオンだつていてそれから彼をレオと呼んでいました。既成概念による批評をみごとにユーモラスにはねかえすこの答えは、現代っ子のたくましい一面といえるでしょう。

でも一方で  
はこんなこと

もありまし  
た。りすのグ

ループではは  
じめはりすの

顔をかいてい  
たのですがど

うも感じをだ  
すのがむずか  
しいらしいの

です。本箱の  
中の絵本を見  
て、りすの絵

な表情のうちに配役がきまってしまったり、希望の役をやりたいものが数人いてジャンケンで勝ったものにきまつたということもあります。

配役がきまつてから小道具（お面）をそれぞれのグループで相談しあつて作る段取りになるのですが、そこでもいろいろな話が展開されました。

くまのグループでは六人のうち茶色のくま三人、黒いくま一人、白いくま二人とそれぞれつくつていましたが、茶色のくまをつくっていた子どもが、「森には白くまなんかいないよ」と白いくまの子どもにいました。その時何と答えるのかと思つてみると、A夫は



北風が吹いてきたので、旅人たちはオーバーをとばされないようにしているところ

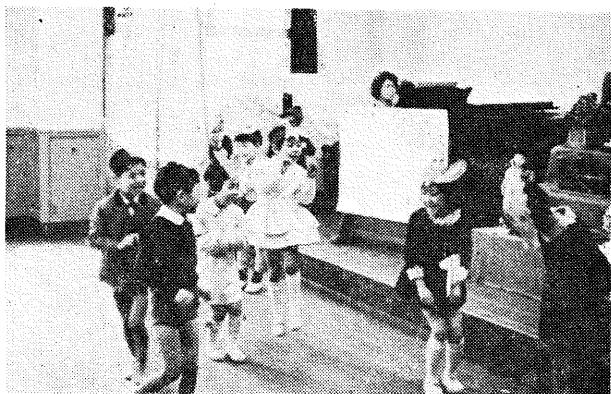
ました。これは私などが絵をかこうとするとき、やつたこともあるかもしないと思って「あら！」とおかしくなってしまいました。結局いろいろ見たりしているうちに、りすはしっぽをかかなくては似てこないと、子どもの結論がでました。そして顔だけでなく身体も全部かく、ということにりすのグループのお面はまとまつたのです。

それからせりふをみんなが少しずつ話すことにして、ことばを子どもと先生とでいっしょに考えていました。はじめははきはきた積極的な子どもはすらすらとことばができますが、てれやさんや気の小さい子どもはことばがでてこなつたり、声が小さかつたりして進行がスムーズに行かない場面も多くありました。こんなに大勢の子どもがみんなでて、がやがやしていて肝じんのことばはき

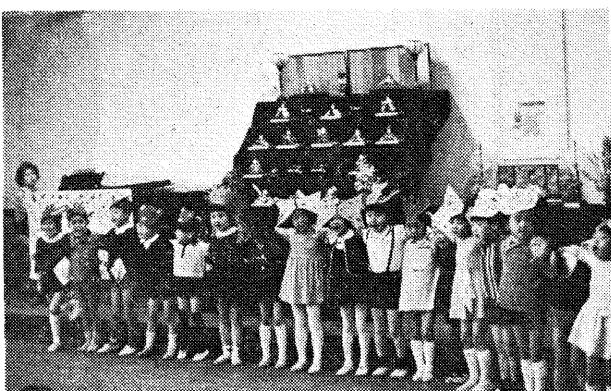
お日さまに照らされて、旅人たちはあつくてたまらなくなりオーバーをぬいだところ



りす「春になってうれしいわね」「お日さまこんにちわ」



みんなで「ポカポカ春が」のうたをうたっているところ



きとれなくどうなるのかしらと思うこともありましたが、配役をきめる前にいろいろな役をやってみたのがよかつたのか、自分が決まつた役以外のことばもお互い同志よく考えてくれましたし、グループダイナミックスのおかげもあって結局は五歳児らしいところにおちついていったようです。それに当日はお客様さまが大勢なのでうれしくてはりきってやりました。

また、ひなまつりがすんでからも「また、げきをやりましょうよ」といわれたこともあります。

曲が適當なものがなかなか見つからなかつたり、思うようにそれのことばがでてこなかつたりで困つたときもありましたたが、今考えてみてやはり卒業近い時期に、みんなで気持ちを合わせて一つのことをやつてみたという経験は尊かつたと思います。劇あそび 자체としては、もっと程度の高いことをこなす子どももあるでしょうが、先生から与えられた役をやり、与えられたせりふを話し、動くのでしたら見た目に上手であつてもそれは活きた子ども自身のものになっているとはいえないでしょう。

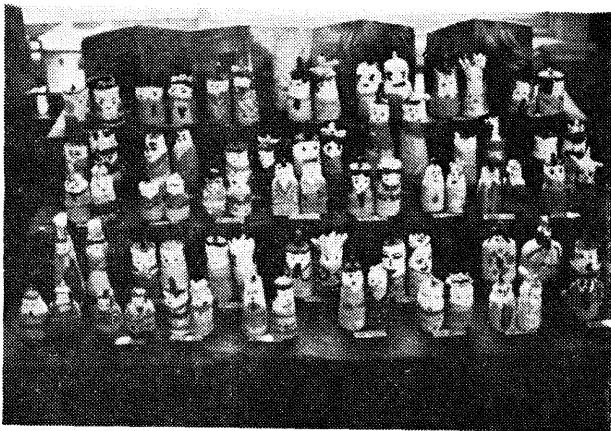
例え、ことばがつたなくとも、みんなで考え、みんなで協力しあつてやつたという経験が今度の場合も大切だったと思います。何をするときでも、できるだけ自分自身の力でののを考え、ことを運ぶような気持ちを小さい時から育ててみたいと思いつつ、三年間を過ごしてきましたので、この劇あそびの時も、時間をかけてみんなで手をつけないで、一つ一つ階段を上がるようにして考えていました。

幼稚園の生活ではあそびの面には六領域が統合的に組み合わさったものが多いのですが、例えば砂場あそびでも積木あそびでも、いろいろなごっこあそびでもみなそうなのですが、劇あそびもその一つの顕著な例になると思います。社会・言語・音楽リズム・絵画製作、そして健康・自然の六つの領域のことが有形無形で入っていると思います。

劇あそびの経験の浅い頃は、教師が適切な指導をすることによって子どもをひっぱって行く、まとめていく、つまり教師から与えられたもので子どもは経験を豊かにしていくこともあります。そして子どもの劇には他のあそびと同じようにああ、おもしろかった！という感じが残れば充分だと思います。

けれど卒業期に近い子どもたちなら今までの経験を下地にして、何か自分たちでつくりだしていくこともできるでしょう。教師は子どもたちの役を果したいと思います。そうすれば、言葉の発表の面でも、動きのリズムも、小道具作りもみな今までの経験の積み重ねからでてきたものが自ずと表われてくると思います。こういう考えから生まれた劇あそびは、表現はつたなくても子ども自身のものであるでしょうし、六領域の総集的なものも幾らかなりとも見られるのではないかでしょう。

## ○おひなさまつくり



毎年、このよう  
なひなまつりの計  
画と並行して、各  
クラスではおひな  
さまをつくる楽し  
い仕事が行なわれ  
ます。私のクラス  
では三歳のときは  
だいりさまの着物  
を厚紙の円錐形で  
つくり、顔は別に  
かいてつけました  
が、この時はまだ  
おひなさまを感觉  
的にとらえていた  
し、まだ手の方が思うように動かない子どももあるので、子どもと  
先生の合作みたいなものでした。金色のかんむりなどをちょっとつ  
けてあげたら、とてもおひなさまらしくなってみんなで喜んだのを  
覚えています。四歳のときは、箱を土台にしてひなだんをつくり、  
だいりさま、三人官女、五人ばやしとにかくにかぎりました。  
今年はもう二回目、三回目の経験になりますし、幼稚園時代の思  
ました。

### ○卒業の前

こうしてだんだんと日がたち、今度は卒業の準備に心せわしくな  
つきました。子どもの側は卒業式の練習をしたり、お友だちに贈  
る絵をかきあげたりすることが主でしたけれど、だんだんわかれ  
るという気持ちもわいてくるのでしょうか。「もう、先生ともお別れ  
ね」と卒業式が近くなるにつれ、いわれました。そして小さな紙で  
つくったハンドバッグとか、野草の花たばのプレゼントなどを女の  
子からもらったり、男の子は庭の小石のきれいなのを集めて「とつ  
ておいてね」といって渡してくれました。そして私の机のひきだし  
にはいつの間にかこういう小さなプレゼントがたくさんたまつてい  
ました。

子どもたちが帰つてから、私は絵の整理をしたりアルバムをはつたりに寸暇もないほどでしたが、入園当初の写真をはるびに二年なり、三年なりの年月の流れを今さらながら身にしみ、一方では子どもの成長に目を見はる思いでした。

三歳、四歳のときのあのあどけない幼い表情、それにつけても一人一人のその時その時の思い出がよみがえつてくるのでした。それからさまざまあそびや行事の記録、どれもなつかしく思ひながらはるのでした。大きくなつて時折このアルバムを見る子どもたちも、幼稚園のときこんなに楽しくあそんだということをきつと思ひ出すことでしょう。

今年はまた、はじめての試みとして声のアルバムをソノシートでつくりました。氏名をいい、大きくなつたら何になりたいと思うと言ずついたのをまとめたものです。プラスティックの博士になりたいとか、ジェット・パイロットになりたいという時代的な表現もなるほどとおもしろく思いましたし、幼稚園の園長先生になりたいという男の子、幼稚園の先生になりたいという女の子が一人ずつあってちょっぴり心楽しい思いでした。大きくなつたとき、幼稚園の頃はこんなことを考えていたのかきっとおもしろくなつかしく聞いてくれることでしょう。

××

××

ここには何か一つのあそびについて書いてみようと思っていたのですが、卒業させた子どものことを思い出すうち、その子どもたち

とあそんだ日々、さまざまなあそびその姿、いろいろなエピソードが頭に去来し、ただ雑感をつづったようになります。



卒業式の数日前、庭の花だんを見ていたら十一月末にみんなでうえた球根が、春のおとずれでぐんぐん芽を伸ばしているのを見つけまし

た。その素直に伸びた緑色の芽を見ながら私はこんなことを思いました。春になつて美しく誇らしげに咲く花も、そのずっと以前に長い間、養分を地下から充分もらつてこそ立派に育つていくのでしょうか。私たちの仕事もこれに通じるところがあるのでないでしょうか。